

## 詩，あるいは死について

渚野 昌

ドイツ語の詩の教科書のようなものを先日買った。その中の詩の日本語訳があまりにもひどかったので、自分の翻訳を試みてみた — 後で気が付いたのだが、訳出したのは、偶然、どちらも、死、しかも生きている者を甘い誘惑でさそうような死をテーマとした短詩である。昼が私を疲れさせたのかもしれない。蛇足かもしれないが、ハイネの詩では韻までちゃんと訳出していることに気づいてほしい。

死 それはひんやりとした夜だ  
ハインリッヒ・ハイネ

死 それはひんやりとした夜だ  
生はといえば蒸暑い昼である  
もう暗くなって私は眠くなった  
昼が私を疲れさせた

大木が私のベッドの上に枝を拵げる  
あのわかやいだ夜鳴き鶯が歌いはじめた  
歌うのは恋の歌ばかり  
それは夢の中にまで聞こえてくる

Der Tod, das ist die kühle Nacht  
Heinrich Heine (1797–1856)

Der Tod, das ist die kühle Nacht,  
Das Leben ist der schwüle Tag.  
Es dunkelt schon, mich schläfert,  
Der Tag hat mich müd gemacht.

Über mein Bett erhebt sich ein Baum,  
Drin singt die junge Nachtigall;  
Sie singt von lauter Liebe,  
Ich hör es sogar im Traum.

薔薇よ おお矛盾以外の何物でもないものよ ...

ライナー・マリア・リルケ

薔薇よ おお矛盾以外の何物でもないものよ こんなにも

沢山の瞳うたの下で誰のものでもない眠りとなる

よろこび

Rose, oh reiner Widerspruch...

Rainer Maria Rilke (1875–1926)

Rose, oh reiner Widerspruch, Lust,

Niemandes Schlaf zu sein unter soviel

Lidern.

リルケの詩の訳の最後から2行目で“瞳”とルビをふったのは、原詩で、ドイツ語の“瞳”の複数第3格 (Lidern) と“歌”の複数第3格 (Liedern) が同じ発音であることをかけていることにちなんでいる。実際、リルケは実際この掛りを意識して“Lidern”という言葉を選んだようである。その証拠に彼自身によるフランス語訳では、この単語は、フランス語の“歌”という単語 (chants) に訳されているのである。

ついでに言うと、同音語の掛りでしめくくられる短詩ということで思いだされるものに、滝口修造 (1903-1979) の「遮られない休息」がある。これは武満徹の同名の初期のピアノ曲にインスピレーションを与えた詩としても知られている。

遮られない休息

瀧口修造

跡絶えない翅の

幼い蛾は夜の巨大な瓶の重さに堪えている

かりそめの白い胸像は雪の記憶に凍えている

風たちは痩せた小枝にとまって貧しい光に慣れている

すべて

ことりともしない丘の上の球形の鏡

そういえば多和田葉子の最近の小説に「球形時間」というのがあった。彼女がその題をつけたときに滝口修造の詩が頭にあったのかどうかは、ぜひとも聞いてみたいものだと思う。

(2005/12/31)

[21.01.22(金 04:05(JST)) 補筆]: 死に関する詩をもう一つ訳出しておきたい。以下の Brecht の詩の日本語訳は、高橋悠治の『慈善病院の白い病室から』で用いられている。この曲の演奏と高橋悠治自身による日本語訳の朗読は、[youtube](#)で聴くことができる。ここの日本語訳は、私にはいささか問題があるように思える。[伯母野山日記](#)でも書いたように、ドイツ語の詩では、言っていることのロジックが重要な役割をはたしているものが少なくな

いのだが、これを日本語の雰囲気であらわす表現に訳してしまうと、もとの詩にあったものがなくなってしまう。この翻訳ではまさにそれが起っているように思えるのである。

私の訳の方が良い、と主張するわけではないが、対照となる例として書き出してみる。なお、高橋悠治の曲で使われている訳での「慈善病院」は Charité の日本語訳であるが、昨今の Alexei Navalny の暗殺未遂での報道などにより、Charité は固有名詞としても十分にインターナショナルになっているのではないかと思ひ、以下では「シャリテ」と訳している。内容から、この詩は、死の床で書かれたもののように思えるかもしれないが、実際には、Brecht は、シャリテを退院して1年くらいしてから亡くなっている。アムゼルは、秋山邦晴の書いたものに „Musizieren“ と鳴く鳥、として出てくる。メシアン音楽に出てくる «Merle Noir» である。アムゼルはテリトリーが大きいので、鳴き声が聞こえてくるときには、一羽のアムゼルのことが多い、遙か彼方の隣のテリトリーから、別のアムゼルの声がエコーのように聞こえてくることもある。詩でも „Eine Amsel“ となっているが、この意味で、ここでの „Eine“ は *explizit* に訳さなくてはいけない冠詞である。

蛇足かもしれないが、夜明け前の鳥の声ということで、昔の伯母野山日記に書いた[文章](#)をリンクしておく。この伯母野山日記の文章からは、ここで書いている文章 (の昔の版) にリンクがはられていた。

## ALS ICH IN WEISSEM KRANKENZIMMER DER CHARITE

Bertolt Brecht (1898 – 1956)

Aufwachte gegen Morgen zu  
Und eine Amsel hörte, wußte ich  
Es besser. Schon seit geraumer Zeit  
Hatte ich keine Todesfurcht mehr, da ja nichts  
Mir je fehlen kann, vorausgesetzt .  
Ich selber fehle. Jetzt  
Gelang es mir, mich zu freuen  
Alles Amselgesanges nach mir auch.

## シャリテの白い病室で

ベルトルト・ブレヒト

夜明け近くに目がさめ

一羽のアムゼルの鳴く声を聞いてよく

分った。もうだいぶん長い間

死の恐怖など持っていなかったのだ、なにしろ無くなって

困るものなど私には何もないのだから、ただ

私自身が無くなって困るかもしれないことを除けば。今は  
受け入れられる

すべてが。私がいなくなった後のアムゼルの歌声さえ。